

の論理に導入し、作品のいっそう有機的な解釈を可能ならしめたのである。

以上に鷺見氏の主要な方法論の一端を紹介したが、私にとってとくに興味深かったのはその方法を支える氏の根本的姿勢である。それは学者の良心といった月並みな表現では言いつくすことができない一つの情念である。

「終りにあたり、私の説明がいままでいささか回避してきた一つの問題点を強調しなければならない。それは最後の章を編むあいだに私の評言の中に生まれた一種の擬態のことである。それが私の全存在をディドロのテキストの中から汲みとることを可能にしたように思えるのである。かの哲学者の操り人形は同時に私のそれでもある。また批評家のあいだではあまりにも有名な脱線といった欲求に対応しうるのは脱線そのものでしかなかった。私の著作に結論が欠如していることもそれで説明がつくのである。」

こうした告白は意地の悪い批評家の手にかかれれば格好な慰み物にされかねないが、私は研究者としての貴重な資質を見出したのである。なぜならば学問の世界にあって自分にもふさわしい(あるいはふさわしいと信じた)相手を選び、それに惚れこむことが不可欠の条件であるからだ。客観的にながめられるのも惚れぬいた後のことであり、初めから距離を置いてながめられるのは裏面白くもない実証主義者だけである。そんな人びとには惚れる相手は誰であってかまわないのだ。そうした意味で鷺見氏の立場はきわめて文学的であり、それだけに惚れぬいた後に氏が見出すであろうディドロ像が見ものである。

さて紋切り型の締めくくりになるが、氏のフランス語の表現について言及することが許されるならば、もちろん私の語学力では氏が言わんとするところを充分に読みとることはできないが、本書の随所に見出されるエスプリというかユーモアというか洒落た言回しは

生硬になりがちな学術論文にどれほどの気易さを加えていることであろうか。

Yoichi Sumi: *Le Neveu de Rameau, caprices et logiques du jeu*. Librairie-Edition France Tosho, Tokyo, 1975.

Philippe Gavi,
Jean-Paul Sartre et
Pierre Victor :
On a raison de se révolter

鈴木道彦

昨年(1974年)の末ごろだったか、本書の出版を知って急いで取次店に注文したところ、この本はフランスで輸出禁止の措置を受けたため日本では購入不可能である旨の返事が戻ってきた。これが事実とすれば、その原因はむろん本書の内容にあるのだろうが、それにしてもなんとも不思議で異例な処置というほかはない。

ところで問題になったらしいその内容であるが、これは1972年11月から1974年3月までの1年半のあいだに、3人の参加者によって行なわれた長い討論を再現したもので、その3人とはまずジャーナリストのPhilippe Gavi(当時33歳)、哲学者のJean-Paul Sartre(68歳)、そしてmaoistes(毛派)と呼ばれる政治集団の指導者Pierre Victor(28歳)である。彼らは1つの共通な目標のために集まったのであって、その目標とは《Libération》(解放)という日刊紙の発行であった。そしてじじつこの新聞は討論進行中に発刊の運びとなり、現在まで2年余りのあいだ奇蹟的にその生命を保っている。仮に日本で、3

大紙や《アカハタ》と並んで、どんな組織の援助もなしに無党派の新左翼系日刊紙が存立しうるものかどうかを考えれば、《Libération》の占める特異な位置も、またその抱えている大変な困難さも、容易に推測がつくであろう。

しかしながら3人は必ずしもこの新聞を語っているわけではない。また当局の逆鱗にふれたのもこの新聞発行のためではないだろう。というか、日刊紙発行などという途方もない企てをも含めて、彼らの表明するすべての思想が当局にとっては好ましからぬものと判断されたのであろう。その思想とは、もし題名に語らせるなら〈造反有理〉ということになる。なお1人の参加者はこの書物を〈自由についての討論〉と題するよう提案しており、ここでは〈自由〉と〈反逆〉〈造反〉とが表裏一体のものとしてとらえられていることも、つけ加えておこう。

〈造反有理〉という言葉は、言うまでもなく中国の文化大革命を通じて急速に広がり、日本では1968-69年の学園闘争の過程でごくポピュラーなものになった表現である。それを今さらのように持ち出すのは、時代錯誤と見なされるかもしれない。じじつ、〈革命〉はおろかすでに〈変革〉という表現まで空疎に白々しく響く季節だというのに、いぜんとしして〈革命的〉であることをやめようとしないう3人の者が、かなり手きびしい相互批判を含みながら自由勝手に展開する議論が本書を構成しているという意味で、これは時流とおよそ縁遠い書物であること確実である。

いったい彼らは何を語っているのか。全体は大きく言って2つに分かれ、前半3分の1ほどは、GaviとVictorが質問者になり、ときには反論を加えながら、Sartreの個人史を本人の口から語らせるという形をとっている。もとよりSartreの個人史はけっして特殊な1個人の経験というだけにとどまらず、

とりわけ第2次大戦以後はそのまま現代史に通底しており、それへの評価は人によって分かれるにしても、時代を作りかつ時代に作られた思想と実践の典型であることに間違いない。おそらく本書の前半が彼の辿った足跡を明らかにすることにあてられたのは、そのためであろう。それを受けた後半では、討論が行なわれた時点での実践上の諸問題を中心に、それに関連した情勢分析と理論展開が試みられる。たとえばある章では、ストライキから工場占拠、生産の自主管理へと向かったLIP(時計製造)の闘争の経験が検討され、別な章ではアジェンデ政権を倒したチリの軍事反乱から教訓が引き出される。さらに権力の考察にあてられた1章がある。それというのも、革命=権力奪取という古典的図式が、フランスのような国では当面まったく実現の可能性に乏しいと思われるうえに、たとえその可能性があったとしても、権力の持つ腐敗作用が今やあまりにも自明のこととなった以上、権力そのものをどう考えるのかという問題があらためて検討を余儀なくされるからである。これに関連して〈革命的〉ということの意味も、当然のことながら考察の対象となる。議論の初めから強調されているのは〈不断のイデオロギー革命〉であり、また人間の作り出したものでありながら惰性的に人間を支配するものと化した諸制度に対する〈壊乱的行動〉(actions subversives institutionnelles)であるが、討論の最後ではいわゆる職業的革命家などといわれる存在も、ほとんどその現代的意義を否定される結果になっている。

こういった多岐にわたるテーマを列挙することは、とてもできそうにない。そこで敢てひと口に要約するならば、ここには1968年の〈5月革命〉の経験をそれぞれの仕方でも反省し蓄積しながら、その後の数年を生きてきた者のみの発しうる言葉がある、とでも言えようか。経歴も思想も年齢もかけ離れている

彼ら3人にとって共通の出発点になっているのは、この〈5月革命〉であろう。

一つの社会は、どうやら否応なしにその日付を負わされているものようである。ちょうど個人が、好むと好まざるとにかかわらず、その過去を背負い、過去に印づけられているように。それはけっして過去に縛られて身動きがとれないということを意味してはいない。むしろ逆に、そのように過去を背負っているところにこそ、すべての自由と選択の根拠がある、と言うべきであろう。過去（の日付）に対する各人の姿勢自体が、同時にその人の自由を示していると言ってもいい。学生の反乱から労働者のゼネ・ストへと一気にかけぬけた1968年5月の事件は、フランスの社会にとって明らかにそういった数少ない日付の1つである。

とはいえ、討論に参加している3人が、この〈5月〉をめざましく生きたわけではない。たまたまそのころフランスにいた私は、Gaviの行動をよく承知しているけれども、彼は当初この〈革命〉の進展を前に呆然としていたものである。またVictorらの中国派（ML派）は、カルチエ・ラタンの反乱を過小評価してこれに目もくれなかったために、数カ月後には組織の内部資料として、膨大かつ全面的な自己批判書（Bulletin No 1）を発表する始末だった。本書の序章でもVictorは、〈ぼくは精神には伝統的なマルクス主義的思考の保守的な面がいくつかあって、それを1968年5月に問い直すことができなかった〉と正直に告白している。Sartreに至っては、なるほど彼の思想的営為が〈5月〉を準備する諸要素の1つであったにしても、彼は結局のところだれからも知られた〈スター〉として行動していたのだから、とうてい〈5月〉の渦中にいたとは言えない。私はこの〈5月〉を挟んで2度ほどSartreとゆっくり話をすることがあり、とくに2度目に

は彼の〈5月〉観に基本的な疑問を持ったものである。1968年5月とは、無名者の自由の祭典であった。だからその主役たちが、押しなべてSartreに冷笑的反発的であったのは、理由のあることであつたと私は考える。ところが当時Sartreはこのことにまるで気づいてさえいなかった。

要するに各人の位置や程度に差こそあれ、この3人は〈5月〉の推進者とはほど遠い存在であった。おくれればせながら反権威的で自由でしかもどこか頼りない〈5月〉の空気を呼吸したのは、3人のなかでおそらくGaviだけだったのではないか。それでも彼らは、異議申し立ての主役たちが急速に姿を隠すことを強いられた曖昧な状況のなかで、抵抗の可能性を執拗に探るという形で〈5月〉の意味を掘り起こしつづけてきたように見える。日刊紙の発行もその1つの現われである。こういった行動は、むろん献身とか犠牲的行為などとまではまるで無縁のものであるが、このような執拗さを私は無視したくない。

この執拗さを支えてきたのは、いったい何であろうか。彼らは先にも述べたように、制度的な機関（institutions）——その典型は法であり裁判所である——をそのまま容認することが絶対にならないのだから、彼らの執拗な行動が外側から制度的に支えられるはずはなく、それはどこまでも各人の自発性にもとづくものであろう。Gaviは、反権力的な抵抗の集団のなかにplaisir（喜び、快楽）があることを強調しており、Sartreはそれを肯定して、〈同じ要求、同じプラクシスを持つ他の人間と共に〉いようとする願望を指摘しているが、これら3人とその同志たちの作り出す行動がそのような欲求や楽しさを伴っていたことは確実である。

これはいくぶんか、Sartreが《弁証法的理性批判》のなかで描いた〈溶融状態の集団〉（groupe en fusion）に通じるものを持って

いる。Sartre は、この無定形な〈溶融集団〉が、組織として形をなしてゆくにしたがって、〈誓約集団〉、〈組織集団〉、〈制度集団〉と変化し、それに応じて自由な実践が惰性的なものにとってかわられる筋道を詳述した。私自身も少し前に、この Sartre の集団論を念頭におきながら、制度的なものに墮してしまうことのない集団の可能性を探ったことがある。私は仮にそれを〈委員会の思想〉と呼び、その特徴として (1) 徹底した自発性、(2) 言葉と行為の密着、(3) 社会的分業の排除、(4) 無名性、の4点を挙げておいたが、〈5月革命〉のさいに自然発生的に出来上がった無数の行動委員会の多くが暗黙のうちに目ざしていたのも、そのようなものであったと私は諒解している。

〈委員会〉という言葉を持ち出したついでに少々脱線を許していただきたいのだが、この言葉を使うときに私が思い出すのは、〈委員会の論理〉を書いた中井正一である。その中井にはまた〈スポーツ気分の構造〉という有名なエッセイがあり、先ほど Gavi の plaisir (喜び、快樂) という言葉を引いたときに私が思い浮かべたのも、中井のふれているスポーツのチームの〈集団的実存的性格〉、〈共同存在的性格〉であった。ところで鶴見俊輔はこの中井正一の文章にふれて、〈このような集団的実存的気分のコミュニケーションこそ、スポーツの意味である〉と言い、そこに〈新しい集団の創造という今日から未来にかけてのわれわれの課題〉があることを読みとっている。この鶴見の文章は1959年に書かれ、1962年刊の中井正一《美と集団の論理》に収められた。つまり〈声なき声〉やベ平連経験以前に書かれたものであることに注意しておく必要がある。

私は集団論・組織論のなかでこのようにスポーツを重視した中井・鶴見の着眼に敬服するが、既成の秩序や制度に対抗しつつ形成さ

れる集団ということ考えた場合に、スポーツ・チームから発想しようとは思わない。逆に私の知るかぎりどの国においても、スポーツ（とくに集団のスポーツ）は、制度機関を温存し、強化し、ときには制度のお先棒をかつぐという役割すら担っているように見えるのである。ピーター・デーヴィス監督の《ハーツ・アンド・マインズ》は、ヴェトナム人の頭上にボール爆弾や落葉剤をまきちらして彼らを殺傷するアメリカの航空兵と、アメリカン・フットボールの〈気分〉との関係がどんなに密接なものであるかを、きわめて皮肉に描き出していたけれども、これなどはその典型的な例であろう。

どうしてこういうことが起こるのか。ただちにいくつかの理由が挙げられようが、スポーツに内在的な問題としては、ルールということがあるように思われる。多くのスポーツにおいては、ルールは初めから与えられており、かつルールが支配している。だからスポーツの作る集団は、たとえ初めは自発性にもとづき、また社会的分業を排除した無名の存在の集団として形成されても、あらかじめ制度的なものをはらんでいると言っている。むしろ私は、スポーツの愛好者として、このことを書いているのである。

以上の考察は、脱線であるにはちがいないが、集団の問題を考える上で無意味なことだとは思われない。それというのも、既成の秩序や制度をあらかじめ手放して承認してしまうならいざ知らず、そのような秩序や制度に具体的に一矢をむくいと身銭を切って考える者は、必ず集団と組織の問題に頭をぶつけるからである。つまり、たとえ共通のブラクシスのみで結ばれた行動委員会や溶融集団といえども、少しでもそれが存続しようとするれば、たちまち制度化の危険を警戒することが必要となる。またその反対に、われわれが生きていくということは多かれ少なかれ制度

のうちにとりこまれていることを意味しているのだから、せめて制度化した己れの存在部分を、反制度的な光で常に照らし出しておくことが必要とされるのではないか。

その点で、本書の討論にはさまざまな配慮があると言えよう。たとえば最初にふれた《Libération》は、反権力的で反制度的な情報紙として企画されたのであるから、その新聞作成の過程で制度的な思想の介入してくることは、細心の注意を払って警戒せねばならない。Victor が次のように語るのはそのためであろう。

〈事をはっきりさせて言えば、編集スタッフを構成する社会的カテゴリーの自由は、しばしばこのスタッフのなかにはいない社会的カテゴリーの自由、たとえば労働者の自由を犠牲にして行使されるのだ（……）。しかもこの2つのカテゴリーの分化は偶然によるものではない。それは現在の社会の分業に結びついているのだ。〉

解放のための企てや仕事であったはずなのに、いつの間にかそこに社会的分業にもとづく抑圧関係が再生産されていることを指摘しているわけだが、これが容易に解決できない難問であることはただちに見てとれる。ましてことが新聞の作成となれば、事件を選び、取材し、記事を書くという仕事が、相当の熟練を必要とすることは暗黙の前提である。書かれたものは、日刊紙である以上多くの読者に読まれねばならない。そして、多くの読者に読まれるものを、だれもが書けるわけではない。それが書けるということは、このよう

な新聞の記者として必要条件である（ちょうど先ほどのスポーツの例を引くならば、たとえば草野球やママさんバレーといえども、〈うまさ〉や〈強さ〉が物をいうようなものだ）。こうして編集や執筆のスタッフは、おのずから固定する。しかもそれが、ある社会的カテゴリーに、つまりは分業に対応している、というわけだ。にもかかわらず、いま1つの日刊紙を発足させることが要請されているとすれば、そこに現われた社会的分業に対してどうやって非権力的な立場を対置させ、これに歯止めを加えていくのか、Victor が問題にしているのはおそらくこのような事柄であろう。

同じような性質の問題を、Sartre は〈知識人〉というテーマで考えている。実をいえば私は Sartre の知識人論について少々たちいった考察を展開するつもりであったのだが、それにとりかかる前にもはや与えられた紙数を大幅に越えてしまった。ただひと言だけつけ加えておけば、ここで討論参加者たちが問題にしている社会的分業をふまえた〈知識人〉の問題は、大学というレッキとした制度機関においては戯画的なものになってしまっている。われわれはそれを免れることができない。とすれば、どうしたらよいか。明快で華々しい解決などあるはずはないことを承知の上で、やはりこの時代錯誤の問いだけは最後に記しておきたいと思う。

(1975年9月10日記)

Philippe Gavi, Jean-Paul Sartre et Pierre Victor: *On a raison de se révolter*. Gallimard, 1974.